
神のいる日常

風花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神のいる日常

【Nコード】

N9917A

【作者名】

風花

【あらすじ】

普通を好み、普通に生きてきた青年秋本信一の日常がある日突然『神』によって変化してしまう。

プロローグ（前書き）

はじめまして。風花と申します。

初投稿です。誤字、脱字があった場合は馬鹿にしながらでもいいので作者にお教えください。

さて、この小説は『非日常』を描いた物だと思ってもらえば結構です。

18禁要素は微塵もありません。

恋愛要素も微塵もありません。

それを理解している状態で呼んだいただける事を深く深く望んでいます。

プロローグ

それは、俺が高校一年生になったまだ少し寒さが身にしみる4月の事だった。

平均点より少し上の点数で高校入試に合格し、平均より少し大きめの制服を買い、それなりにワクワクしながらの初登校。

勉強についていけるか、友達は出来るか、部活は何にしようか、そんな事を考えながら聞いていた校長の話。

適当に聞き流した担任教師の自己紹介。

自分では上出来だと思えた自己紹介。

ここまでは普通だった。どこにでもある、気が狂うほどまともな日常だった。誰が体験してもおかしくない日常だった。

あの事件さえ起こらなければ、この日常は続いていたかもしれない。いや続いていただろう。

その事件は入学旅行の時に、俺の周りで、俺だけに対して密かに始まっていた。何故始まったのか――？

そんな事は分からない。ほんの少しの親切心が引き起こした、何でも望みのかなう世界。

何にも不自由しない日常。望めばなんでも手に入る、そんな日常。望んでいなかったと言えは嘘になる。

しかし今ではこんな非日常はクソ喰らえだ。

どうしてこんな事になったんだろう？

どうしてあんな事をしてしまったんだろう？

今考えるとそんな事しか考えられない。

ああ、神なんて助けなければ良かった……

出会い

桜の舞う季節、春。

俺はこの年の春、地元の高校の入試に受かりその高校の生徒になった。

そして今日はその記念すべき初登校。

登校中風景は中学の時とあまり変わらない。通学路では男子が体をたたき会いながらの挨拶を交わし、教室では女子が数箇所に別れいくつかのグループをすでに設立済み。

この程度の風景なら小学校でも中学校でも見れる。

『普通』

俺に一番好きな言葉だ。どのくらいの間人も所詮人間なんだと俺に教えてくれる。

校長の話、担任の話、同じクラスの奴の話。どれもどこにいても聞けるような普通の話だった。

聞いていて眠くなるような話をする校長。やけに熱血な新任の担当教師。必死に友達を作ろうとするクラスメイト。

どれもどこにいてもおかしくない存在。そんな事を考えながら熱血教師の話を聞いているとあまり耳にしない単語が教師の口から放たれた。

「えゝ今年の新入生、つまりお前たちは来週『入学旅行』をするのとが決定したゝ」

は？なんだそりゃ。修学旅行とかなら分かるがなぜ入学旅行？

そんな事を考えていると1人の男子生徒が、

「先生、入学旅行ってなんですかゝ？」

「それはだな、この学校の校長先生の提案で全員が仲良くなれる機会を作ろうと言う考えで――」

なるほどね。まあその手の事を考える校長なら全国を捜せばそこらじゅうにいるだろう。

入学旅行だつて世界中探せばやっている高校の1つや2つはあるさ。
「センセエ」旅行つてどこ行くんですかあゝ？」

1人の女子生徒が嫌そうな顔をしながら聞く。嫌なら聞かなくていいじゃねえか。

「。×町だそうだ。お前たちの中では行った事のある奴はいるか？」

あるわけねえだろ。青森の隣だぞ？ここ兵庫だぞ？それを日帰りで行く気か？

「ちなみに日帰りだ」

マジかよ！ありえねゝ…絶対普通じゃないつてこの学校。

「まあ行き先は冗談だがな。ハッハッハ、本当は。町だ」

いるよなゝこういう意味も無い嘘言う教師。町か、隣町だったな確か。

「じゃあ今日はこれまで！」

担当の話だけの初授業で俺の高校生活第1日目は終了した。

そして迎えた旅行当日。

「全員揃ったなゝ！しゅっぱつするぞゝ！」

排気ガスを吐きながらどこにでもあるようなバスが出発した。

町。どー考えても手抜きとしか思えないこの町の名前。いいのだろうか？

入学してまもなく、友達と呼べる存在もまだいないので俺はバスで移動している間を寝て過ごした。

そして妙な夢を見た。

白装束を着た男を助け御礼を貰うと言う昔話などでよくある話だった。しかしやけにリアルだった。

多少の疑問を残しつつ教師に言われるがままバスを降り自由行動（1人）をすることにした。

最近の日本は田舎が減ったと思う。ついこの間まで山だらけだった

県も半分以上がビルになっていたり、駐車場になっていたり……
そんな中でこの。町はいまだに和風の家が洋風の家より多く田んぼだらけの町だ。

そんな田舎の道路のと真ん中で男が倒れていた。

「だっ、大丈夫ですか！」

そう聞くと男は周りを見渡した。いや、てめえに言っただよ。

「あなたですよ！大丈夫ですか！？」

「えっ、私ですか？」

他に誰もいないから。

いるのはなぜか付いてきた野良猫ぐらいだから。

俺は男に近づき肩を貸した。

「すみません……助かりました」

「いえいえ」

よく見ると男は白装束を着ていた。背中に妙な物が付いていた。

「すみませんが……あなたには私が見えているんですか？」

「は？」

何言っただこいつ？見えるに決まってるじゃねえか。

すると近くを歩いていたおばさんたちがこつちを見て笑っている。
なんだ？

「私の姿は普通の人には見えないんですよ」

「はあ？」

それが、俺と神の、秋本信一と神見習いの出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9917a/>

神のいる日常

2010年12月18日14時46分発行